

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「現代世界の分断と共生の検討：イスラーム・ジェンダー学的アプローチから」  
(2024年度第1回研究会)

日時：2024年4月6日(土) 15:00~19:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト／Zoomによるオンライン同時開催

報告者：竹村和朗(高千穂大学、AA研共同研究員)

内容：

課題について：後藤絵美(AA研研究員・課題代表)

報告1：鳥山順子(AA研共同研究員・立命館大学)

「イスラーム・ジェンダー学科研と考えるコロニアリティ——インターセクショナルリティ偏重批判と第三世界フェミニズムの再考から」

報告2：長沢栄治(AA研共同研究員・東京外国語大学)

「イスラーム・ジェンダー学科研の八年を振り返って——最近、考えていること」

今後についての相談：各共同研究員

本研究会は、今年度から始まるAA研共同利用・共同研究課題「現代世界の分断と共生の検討：イスラーム・ジェンダー学的アプローチから」の初回である。冒頭、課題代表の後藤が、共同課題制度の概要と目的、実施計画、メンバーを紹介し、2つの報告の後に、各共同研究員が自身の研究課題の見通しを述べた。

報告1と2はともにイスラーム・ジェンダー学科研との関係から内容が作られているが、これは、本課題が2024年3月まで2期8年続いたイスラーム・ジェンダー学科研(第1期「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」2016~2019年度、第2期「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」2020~2023年度、ともに代表は長沢栄治)の問題意識を継承し、これを発展させながら「現代世界の分断と共生の検討」を行うことを目指していることによる。

報告1では、鳥山は、ジェンダー研究者として、イスラーム・ジェンダー学科研(以下、IG科研)がイスラーム研究の中でジェンダーを中心的概念に押し上げ、具体的な議論を積み上げてきた点(特に明石書店から刊行される『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ』の既刊8巻において)を高く評価しながらも、はたしてジェンダー研究に何が貢献できたか、と問いかける。鳥山はIG科研の特長を「複雑な現実を複雑なままに考える」手法に見出し、その意義を、近年ジェンダー・思想研究の中で注目を集める「インターセクショナルリティ」概念を通じて検討した。質疑応答で、ジェンダー研究の中でイスラームはいまも特殊なもののみなされがちとの指摘がなされた。これを踏まえれば、今後なすべきは、単にジェンダー研究の中にイスラームを織り込むとか、イスラーム／ムスリムの普遍性を強調することではなく、西洋／非西洋、帝国／植民地、宗教／世俗の複雑な関係性を内包したイスラームをも視野に入れたジェンダー研究の方法、枠組みを提案し、構築していくことになるだろう。

報告 2 では、IG 科研を 8 年間牽引した長沢が、その軌跡を振り返りながら、E・サイードが晩年に希求した「新しい人文学」に案を得て、イスラーム・ジェンダー学的アプローチの中で今後必要とされる課題として、「近代の複数性」「フォビア論」「合理的と理性的の違い」の 3 点を挙げる。「新しい人文学」に関する長沢の考えは、日本イスラム協会が発行する学術誌『イスラム世界』第 100 号に掲載された『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ』の既刊 1～5 巻についての「書評に対する応答」(pp.149–157) に記されている。

「近代の複数性」を通じて長沢は、鳥山と同様、イスラームのジェンダー研究を行う際には、非西洋の場における近代の歴史性、権力性（支配・被支配）、抑圧と模倣の絡み合いに鋭敏であることを求める。「フォビア論」と「合理的と理性的の違い」は、現代の欧米社会で起きていること、および昨今のガザ人道危機の状況を踏まえて提出された論点であり、そのまま、本課題の「現代世界の分断と共生の検討」に通じる。質疑応答を通じて、イスラーム・ジェンダー学が西洋的近代を問い直す特徴を持つことが再確認された。

質疑応答と各共同研究員によるコメントは、研究に対する熱意 (passion) と苦境にある他者への思い (compassion) に溢れており、本課題の今後の大きな展開が期待される。